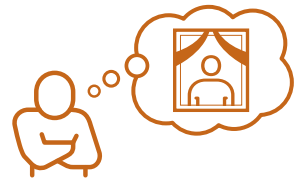




## “へっつい幽霊”にみる おひとりさまの終活



MUFG相続研究所 フェロー いりえ まこと  
入江 誠

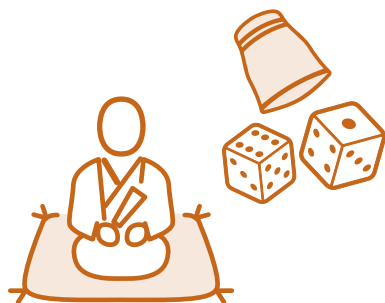
長屋住まいの熊さんと隣に住む若旦那の銀ちゃん(遊び人で勘当中)は、幽霊が出るという噂がある「へっつい」※1を、道具屋から1両の引取料を貰うかわりに、絶対に返品しないという条件で引き取ります。



この「へっつい」は、博打好きの左官屋が作ったもので、流れ流れて道具屋の店先に並んだものの、買った人が家に持ち帰ると丑三つ時(うしみつとき)※2に男の幽霊が出て、「金出せ～」と脅すので、翌日には売り値より安い値段で返品されることを繰り返し、そのうちに他の商品もぱったりと売れなくなって困っていた“訳あり”の品でした。

※1: 竈(かまど)炊飯等に用いる調理設備 ※2: 午前2時頃

引き取った「へっつい」を2人でかついで長屋に戻る途中で、若旦那がよろけて角をぶつけ、そこから出てきた包みの中身は何と300両の大金です。「これが心のこりで化けて出ていたのか。」ということで、2人は山分けしてあっという間に使い切ってしまいます。300両はなくなったので、もう幽霊は出ないだろうと思っていたら、夜、若旦那の枕もとで今度は「金返せ～」。このあと、熊さんが若旦那の実家からお金を工面し、今度は熊さんが幽霊を脅して折半するも、



双方半分では不満足で丁半博打で勝負、そのまま一気に落ち(サゲ)に向かいます。このお話は古典落語の名作「へっつい幽霊」です。私はなんといっても三代目 桂 三木助の味わい深い語り口が好きですが、皆さんは如何でしょうか。

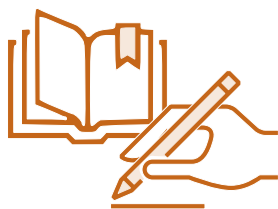
次ページへつづく▶

この幽霊はもともと独り身で、博打で大当たりして手に入れた大金の一部を「へっつい」に塗り込んだまま、今度はフグにあたって命を落としたのですが、何の書置きも残さなかったもので、結局、誰にも知られることなく「へっつい」は転々と売られていきます。幽霊としては、お閻魔さまへの心づけのために何とか金を出して貰おうと、夜な夜な枕元に現れたのですが熊さん以外は怖がって願い叶わず、ということでした。このお話の教訓(と言えるかどうかはともかく)は、大切な財産は誰かにそのありかを伝えておく、或いは書きとめておく、です。



ところで、そもそも落語の登場人物には、年齢を問わずいわゆる「おひとりさま」が多いように思います。とりわけ長屋の住人は、八つぁん、熊さん、与太郎など、一人暮らしで人生を謳歌している人、という印象があります。江戸時代だとすれば、ちょうど家督相続が確立した時代と言われているので、長男以外は家を出ていたということでしょうか。また、「隠居」という制度により生前に家督を譲った高齢者も、夫婦のみ、あるいは単身で別世帯を構えていたのかもしれませんが。

いずれにせよ、最近ではライフスタイルの多様化が言われており、「おひとりさま」もその一つですが、「おひとりさま」の終活は自分らしい人生のエピローグということに加え、



あとの人に苦勞をかけない、という意味もあると思います。特に財産についてはきちんとエンディングノートや遺言にして残しておいた方がいいでしょう。そしてこの左官屋さんのように、人生、いつ何が起こるかは誰にもわからないのです。

(以下、ネタバレを含みますのでご注意ください。)

このお話は、熊さんに負けた幽霊が巻き返しを狙って「もう一回」と持ち掛けますが、お金が底をついているので熊さんに断られ、「あっしも幽霊ですから。決して足は出しません。」というサゲで終わるのですが、おひとりさまに限らず、人生の足は出さないようにしたいものです。

